

改訂版 あとがき

今から約385年前の1637年(寛永十四年)、天草・島原一揆(乱)が勃発した、その一揆初め、町山口川近辺では、一揆群と唐津藩側とで激しい戦いが繰り広げられた。両軍のおびただしい戦死者で、川の流れは真っ赤な血の色に染まったという。

そして、時は流れ、乱から役約200年後、この地に石橋が架けられた。1832年(天保三年)のことである。明治維新の36年前だ。そして架橋から190年後の今日まで、ほぼ架橋当時の姿で、現存している。しかも、生活道路として利用されている通用橋として。

架けられた当初は、名前がなかったようだが、この橋が祇園神社の前にあることから、いつしか祇園橋と呼ばれるようになった。

江戸時代から明治初期までに架けられた石橋は、各地に多く存在している。天草にもこの祇園橋の他にいくつかの石橋が残っている。その石橋のほとんどは眼鏡橋と呼ばれる形式である。

天草の眼鏡橋としては、楠浦方原川の石橋、本渡広瀬川の市ノ瀬橋、祇園橋の上流に架けられている施無畏橋、あるいは亀場町食場、亀川の支流の志安橋等がある。

しかし、祇園橋は、これらの眼鏡橋とはまったく異なる形式の橋である。

眼鏡橋を架けるには、道面と川底まで、ある程度の高低差が必要だが、祇園橋のところは、高低差がほとんどない。したがって、眼鏡橋は架けられない。そこで、石工が知恵を絞って架けたのが、多脚式の石橋だ。眼鏡橋には、高度な架橋技術が必要なのは、素人でも見ただけで分かる。それに比べて、多脚式石橋は、原始的な形式であるように見える。

しかし、そうであろうか。この橋の形式は、難しくいうと、たきやくしきえんがたうりょうきよう多脚式円弧型桁梁橋というそうだ。

多脚式という通り、1列5本の脚柱が9列。つまり、45本の脚柱で桁梁を支えている。家の作りにならぬ橋といえる。そして単なる多脚式でなく円弧型であるのが、この橋が幾度の大水等に長年耐えてきた要因であるという。また、円弧型ゆえに見た目にも美しい姿になっている。合理的なもの美しいという、見本のようなものと、筆者は思っている。

もちろん、眼鏡橋も美しい。

それは、現在の技術の粋を集めたコンクリート橋鉄橋が、耐用年数が100年にも満たないのに、石橋が2、300年有に耐えているのは、素材が石という自然が作り上げたものであると同時に、石工たちの巧みな技が凝縮している結果であり、かつ合理的な美を持っているからであろう。

道面と河床との離隔がないため、眼鏡橋は建設できなかつた。そのため、桁橋の形式となった。しかし、桁橋を作る

ためにはある条件がある。それは、河床が岩盤でなければならぬ。もし、岩盤でない軟らかい砂地等であれば、堅固な桁梁柱を安定的に立てることはできない。例え建設できても、ちよつとした大水などで、容易に崩壊してしまうことになる。幸いなことに、祇園橋建設の河床は、堅固な岩盤が露出していた。

さて、祇園橋のサイズは。

川幅は凡そ15間。つまり、約27 m。

橋の長さは28・6 m、幅3・3 m、柱の高さは2・9 m。

柱の間隔は約2・5 mで10連。柱は、30数cm角で、1列が5本で、9列、つまり45本の柱で、梁を支えている。

桁梁橋としては日本一だ。柱の建て方にも、工夫が施されている。上流側柱は、角を前に向けている。これは、水切りをして、柱にかかる水圧を少なくしている。また、下流側の柱は、垂直でなく、やや斜めに、つまり橋を突っ張っている。

さらに、特徴的なのは、緩やかなアーチを描いていることだ。このアーチは、姿を美しく見せるためでなく、洪水のとき上流からの流木等が、橋げたにかかった場合でも、水を流すためだ。

このような工夫をしてあるために、架橋から180年経った現在でも、健在なのだ。先人たちの知恵に感心するばかりだ。

りだ。

水害を防ぐためのアーチ型が、優美な姿を作り出しているのは、ただ単に古い橋というだけでなく、観光的にも後世の我々への先人の贈り物といえようか。

満潮の時は海水が橋まで上がってくるため、祇園橋は、水面に美しい姿を映し出し、とくに優美さを感じる。逆に干潮のときは、露出した岩盤の河床から、屹立した荒々しい45本の柱が、たくましい男性的姿を見せてくれる。つまり、時にたおやかな女性的な姿を、時に荒々しい男性的姿の二面性を見せてくれる、まさに魅せる橋である。

橋を現状のまま残すことが一番大事

さて、問題はこれからだ。

祇園橋を如何に守っていくかである。

祇園橋が国指定重要文化財というだけではない。祇園橋は、架橋からじつと同じ位置に建ち続け、長きに渡り、交通の便の役割を果たすと同時に、街や人の動きを見てきた、歴史の生き証人である。そして、時に優美に時に荒ぶる姿を見せ、人々の心を癒してきた。

我々市民は、この偉大な橋を、今後も長きにわたって保存する義務がある。一人一人の市民がである。また、行政側も、市民以上にその義務があることは、当然のことである。

無謀にも筆を取る

歴史好きな人にとっては、歴史遺産が壊されるのが一番悲しい。日本は世界に例を見ない歴史を持っている。その間、人々が生きてきた陰には、数多い尊い歴史遺産がある。しかし、その多くは壊されて、或いは水害や地震で壊れて現存していない。一度壊されたら、覆水盆に返らずの例え通り、元に戻すことは殆ど不可能だ。既に壊された物ならしように無く諦めようが、現在残っている歴史遺産は、なんとしてでも守らねばならない。それも文書などはともかく、その地に昔から存在している建築物などは、その地でそのまま残すことに価値がある。

可能な限り、移転しないで建築時の位置で。

さて、この書を書こうと思いついたのは、国重文の橋にも関わらず、祇園橋に関する書籍が意外となかったことにある。そこで、祇園橋に関しては全く無知でありながら、無謀にも筆を取るようになった。ただ、祇園橋には、素人的には興味があったので、何回か通い、その都度写真を撮ってきた。その写真がこの書を作るのに役に立った。

出来はどうか。読者の方の判断を待ちたい。

改訂版 2022年3月30日 記

